

リスク・アセット・マネジメント

COSSO ERM (Enterprise Risk Management) の最終化に向けてERMに対する関心が高まっている。関心の高まりに反し、具体的な方法論はCOSSO ERMの最終化を前に依然不透明なままである。ここでは、先進的なリスクマネジメントに取り組んでいる一部の企業の「リスク・アセット・マネジメント」を、具体的なERMの方法論の一つとして紹介する。

リスク・アセット・マネジメントとは

「リスク・アセット・マネジメント」とは、統計的リスク計量手法を用いて企業資産オフバランスを含む（の）リスク度をリスク・アセットとして定量的に認識し、企業の収益性を資産のリスク度に応じ評価し（リスク・リターン）、リスク・アセット配分の最適化を図る「リスク・アセット量と自己資本をベースとしたリスク・バッファー」とを比較し財務安定性を評価する手法による経営管理の実践である。

三菱商事のMCVA、三井物産のリスク・リターン・マネジメント、伊藤忠商事のリスク・キャピタル・マネジメント等はリスク・アセット・マネジメントに独自のネーミングを付けたものである。

リスク・アセット・マネジメントの背景

時価会計や減損会計といった会計制度変更の動

きにより企業の財務リスクは従来以上に表面化しやすくなった。これまでは、財務諸表上、価値下落リスクは表面化しづらく、経営者の適時な対応を動機付けることが困難であった。会計制度変更の動きが資産価値変化に対する企業の意識を高めていることは明白である。また、機関投資家や格付け機関が企業の業績予想を裏切る悪材料を非常に嫌い、企業のリスクマネジメント体制やガバナンス能力に高い関心を示していることも無視できない。不確実性の高い経営環境において、経営者がどのようなリスクマネジメントを実践しているかを外部から知ることがますます困難になってきている。このような状況において、リスク・アセット・マネジメントにより定量的なリスク評価に基づいた経営戦略を実践していることを企業として示すことは、経営者が説明責任を果たす上でも有効な手段であるといえよう。

リスク・アセット・マネジメントの実例

リスク・アセット・マネジメントは金融機関がくわ（Value at Risk）等の統計的リスク評価手法を導入したことが発端となっているが、近年、非金融機関である総合商社、エネルギー企業、輸出入メーカーの一部でも実践され始めている。見逃せない点は、これらの企業では、金融商品のリスク計量に留まらず、事業投資リスクにも適用していることである。事業投

資リスクについては金融機関での実践例等のデファクトスタンダードが存在しないため、リスク・アセット・マネジメントを実践している企業はそれぞれ独自の手法を展開している。

また、重要案件については、別途、損益計算書やキャッシュフロー計算書の要素を加え、リスクドライバを特定し、シミュレーションを実施するといったEARR (Earning at Risk)アプローチも普及している。

リスク・アセット・マネジメントの背景

グローバルに企業のリスクマネジメントや内部統制の品質向上が求められる中で、今後、全社的なリスクマネジメントへの取組みが促進されるものと期待される。リスクの評価や測定は全社的なリスクマネジメントへの取組みの第一歩といえるが、リスク・アセット・マネジメントを実施している企業はリスク評価の対象を次第に定量可能なリスクから定量困難なリスクへと拡大し、バランス・スコア・カードの手法やCSA (Control Self Assessment) 等の内部監査技法を援用して克服しつつある。ERMはリスク・リターンを意識した経営を求めるフレームワークであり、リスクの合理的見積もりはステークホルダーへの説明責任を果たすために必須である。リスク・アセット・マネジメントはリスクの合理的見積もりと最適資産配分の計画手法として今後、さらに浸透していくことが期待される。